

日本アイルランド協会
Japan-Ireland Society

2024 年度

第 31 回アイルランド研究年次大会

The 31st Annual Conference of Irish Studies

11 月 30 日 (土)

Saturday, 30 November

世界平和記念聖堂・カトリック幟町教会

〒730-0016 広島県広島市中区幟町 4-42

Memorial Cathedral for World Peace, Catholic Nobori-cho Church

4-42 Noboricho, Naka-ku, Hiroshima, 730-0016

12 月 1 日 (日)

Sunday, 1 December

広島大学・東広島 (西条) キャンパス

総合科学部・管理棟 (M 棟) 3 階第一会議室

〒739-8521 東広島市鏡山一丁目 7 番 1 号

Hiroshima University, Higashi-Hiroshima Campus

1st Meeting Room, 3F, Bldg. M, School of Integrated Arts and Sciences

1-7-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima City, Hiroshima, 739-8521

共催：広島大学大学院人間社会科学研究所・人間総合科学プログラム／総合科学部

The conference is co-hosted by Integrated Arts and Human Sciences Program, Graduate School of Humanities and Social Sciences/School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

共催 (第 1 日目のみ)：狂言『猫と月』を観る会

The conference Day 1 is co-hosted by the Group for Enjoying the Kyogen-Comedy

The Cat and the Moon by W. B. Yeats in Hiroshima 2024

後援：駐日アイルランド大使館

The conference is supported by the Embassy of Ireland

日本アイルランド協会事務局

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社大学文学部 下楠昌哉研究室内

Japan-Ireland Society

c/o Masaya Shimokusu

Faculty of Letters, Doshisha University

Kamigyo-ku, Kyoto 602-8580 JAPAN

E-mail: info@japan-ireland.com

URL: <http://japan-ireland.jugem.jp/>

プログラム Programme

11 月 30 日 (土) Saturday, 30 November

総合司会 真鍋晶子 (滋賀大学) MC: MANABE, Akiko (Shiga University)

13.00～ 受付 Registration

13.30～14.00 開会挨拶 Opening Addresses

真鍋晶子 MANABE, Akiko

海老島 均 日本アイルランド協会会長

EBISHIMA, Hitoshi (President of Japan-Ireland Society)

駐日アイルランド大使館 Representative of the Embassy of Ireland

世界平和記念聖堂・カトリック幟町教会

Memorial Cathedral for World Peace, Catholic Nobori-cho Church

会場案内 Venue Information

桑島秀樹 (広島大学) KUWAJIMA, Hideki (Hiroshima University)

14.00～14.15 オルガン演奏 Organ Performance 瀬川佳子 SEGAWA, Keiko

14.15～15.00 狂言 *Kyogen*

大蔵流狂言茂山千五郎家による W.B. イェイツ『猫と月』

W.B. Yeats *The Cat and the Moon*

performed by Shigeyama Sengoro Family (*Kyogen*, Okura School)

目の見えない乞食：茂山千五郎

足の悪い乞食：茂山 茂

聖者：松本 薫

後見：山下守之

Blind Beggar: SHIGEYAMA, Sengoro

Lame Beggar: SHIGEYAMA, Shigeru

Saint: MATSUMOTO, Kaoru

Koken: YAMASHITA, Moriyuki

15.15～17.15 シンポジウム Symposium

(会場：広島カトリック会館 1 階多目的ホール／Ground Floor, Hiroshima Catholic Kaikan)

『猫と月』をめぐる一聖なるもの、笑い、そして祈りと平和

On *The Cat and the Moon*--Sacredness, Laughter, Prayer and Peace

構成・司会：真鍋晶子

Chair: MANABE, Akiko

『猫と月』～「笑い」の演劇に見られる周縁者の祈り

The Cat and the Moon: Prayer by the People on the Margin, in the Drama of Laughter

真鍋晶子

MANABE, Akiko

民話における聖泉～現実と超自然の境界

Holy Wells in Folklore—Liminal Spaces between Reality and the Supernatural

梨本邦直 (法政大学)

NASHIMOTO, Kuninao (Hosei University)

崇高・受苦・喜劇—アイルランドとヒロシマ、〈痛苦反転〉の祈りの場として

The Sublime, Passion, and Comedy: Ireland and Hiroshima, or the Prayer's Sanctuaries for the
"Suffering/Pain-Inversion"

桑島秀樹

KUWAJIMA, Hideki

ボンナー・フェローズと戦後日本の平和—ラフカディオ・ハーンの日本理解から学ぶ—

Bonner Fellers and Postwar Peace in Japan: Learning from Lafcadio Hearn's Understanding of Japan

小泉 凡 (小泉八雲記念館館長、島根県立大学名誉教授)

KOIZUMI, Bon (Director, Lafcadio Hearn Memorial Museum/
Professor Emeritus, The University of Shimane)

ゲスト・スピーカー：松本 薫 (大蔵流狂言師)

Guest Speaker: MATSUMOTO, Kaoru (*Kyogen* Actor, Okura School)

19.00～21.00 懇親会 Reception

(18.30 受付開始 【要事前予約／6000 円程度／レストラン・パーティ会場 (市街地・八丁堀交差点
近く。※各自で移動)】)

12月1日(日) Sunday, 1 December

総合司会 下楠昌哉(同志社大学) MC: SHIMOKUSU, Masaya (Doshisha University)

10.00～ 受付 Registration

10.20～10.25 会場案内 Venue Information

桑島秀樹 KUWAJIMA, Hideki

10.30～11.10 研究発表 ① Paper 1

「紛争」と「都市」の狭間で—ベルファスト丘陵における野外レクリエーションと環境保全—

In Between Conflict and City: Outdoor Recreation and Environmental Conservation in Belfast Hills

北島義和(釧路公立大学)

KITAJIMA, Yoshikazu (Kushiro Public University)

司会: 佐藤 亨(青山学院大学)

Chair: SATO, Toru (Aoyama Gakuin University)

11.15～11.55 研究発表 ② Paper 2

エドモンド・バークと王国としてのアイルランド

Edmund Burke and Ireland as a Kingdom

貫 龍太(京都大学)

NUKI, Ryuta (Kyoto University)

司会: 山本 正(大阪経済大学)

Chair: YAMAMOTO, Tadashi (Osaka University of Economics)

12.00～13.30 休憩(昼食) Lunch Break

(12.05～13.15 理事会 Board Meeting)

13.30～14.10 研究発表 ③ Paper 3

アイルランド言語語文化の研究および復興運動は、ナチズムあるいはファシズムとどのように接触し、いかなる関係を持ったのか?

How Did Irish Language Studies and Revival Movements Contact Nazism and Fascism? What Was the Nature of Their Involvements?

廣野元昭(日本アイルランド協会会員)

HIRONO, Motoaki (Japan-Ireland Society)

司会: 高神信一(大阪産業大学)

Chair: TAKAGAMI, Shinichi (Osaka Sangyo University)

14.15～14.55 研究発表 ④ Paper 4

北アイルランドの現代女性小説家たち—変貌する社会の中で、新たな声—

Contemporary Female Novelists from Northern Ireland: New Voices in a Changing Society

八幡雅彦(別府大学短期大学部名誉教授)

YAHATA, Masahiko (Professor Emeritus, Beppu University Junior College)

司会: 北 文美子(法政大学)

Chair: KITA, Fumiko (Hosei University)

15.00 閉会挨拶 Closing Address

山本 正(日本アイルランド協会副会長)

YAMAMOTO, Tadashi (Vice-President of Japan-Ireland Society)

発表要旨 Synopsis

11 月 30 日 (土) Saturday, 30 November

<狂言公演 Kyogen>

大蔵流狂言茂山千五郎家による W.B. イェイツ『猫と月』

W.B. Yeats, *The Cat and the Moon* performed by Shigeyama Sengoro Family (Kyogen, Okura School)

目の見えない乞食：茂山千五郎

足の悪い乞食：茂山 茂

聖者：松本 薫

後見：山下守之

Blind Beggar: SHIGEYAMA, Sengoro

Lame Beggar: SHIGEYAMA, Shigeru

Saint: MATSUMOTO, Kaoru

Koken: YAMASHITA, Moriyuki

アイルランドの心を歌った詩を書いた功績によりノーベル文学賞を与えられた国民的詩人 W.B. イェイツは受賞演説で演劇論を展開した。このように彼にとって重要な演劇の創作に行き詰まっていた時にアーネスト・フェノロサの遺構を整理・英訳していたエズラ・パウンドを通じて能楽に接し、新たな演劇を生み出したが、能楽でも能との関係のみが着目されてきた。『猫と月』について、イェイツは日本人が「狂言」と言っているものとして書き、能を意識した『鷹の井』や『骨の夢』の間に演じて観客の心を緩めせたいと述べたが、日本語の狂言として実演されたことはなかった。そこで、大蔵流狂言師松本薫に本作品の狂言化を持ちかけたところ、松本は上演可能と判断し、自らが属する京都の狂言の名家茂山千五郎家による公演を実現した。イェイツ生誕 150 周年を記念する 2015 年、神戸学院大学グリーンフェスティバルでの初演を皮切りに、日愛外交関係樹立 60 周年記念の 2017 年アイルランド 3 都市での公演を含み 15 公演以上が重ねられている。大蔵流狂言師として長年の経験をもつ松本の『猫と月』解釈に基づき、千五郎家の中心的役者である千五郎、茂兄弟、および松本の三人で展開する狂言版『猫と月』は公演ごとに深まり変化しており、今回の公演での新たな展開が期待される。(真鍋晶子)

<シンポジウム Symposium>

『猫と月』をめぐって—聖なるもの、笑い、そして祈りと平和

The Cat and the Moon—Sacredness, Laughter, Prayer and Peace

構成・司会・発表：真鍋晶子 (滋賀大学)

Organizer・Chair・Panelist: MANABE, Akiko (Shiga University)

梨本邦直 (法政大学)

NASHIMOTO, Kuninao (Hosei University)

桑島秀樹 (広島大学)

KUWAJIMA, Hideki (Hiroshima University)

小泉 凡 (小泉八雲記念館館長、島根県立大学名誉教授)

KOIZUMI, Bon (Director, Lafcadio Hearn Memorial Museum

Professor Emeritus, The University of Shimane)

2024 年度年次大会は、世界平和記念聖堂・カトリック幟町教会において、W.B. イェイツ自ら「Kiogen として書いた」と言う演劇『猫と月』(*The Cat and the Moon*) が、京都の狂言の名家大蔵流狂言茂山千五郎家により日本語の狂言として上演され、それにオルガン演奏が続くことで始まる。これらを受けて行われる本シンポジウムは、広島にある平和記念聖堂と言う特別の「場・空間」とイェイツ作品が投げかけるものについて、分野の異なる 4 人の研究者が、それぞれの専門 (文学、アイルランド語、美学・哲学、民俗学)

に基づくテーマを打ち立てて論ずる場となる。さらに『猫と月』の演出を担当し、「聖者」を演じる大蔵流狂言師にお話いただく。アイルランドの聖泉に関する民話に基づくイエイツの演劇が「笑い」を核にする日本の古典芸能の形で演じられ、そこから祈り、平和という普遍的なテーマが展開し、現代社会が面する問題に光があてられる機会となる。

『猫と月』～「笑い」の演劇に見られる周縁者の祈り

The Cat and the Moon: Prayer by the People on the Margin, in the Drama of Laughter

真鍋晶子

MANABE, Akiko

イエイツの演劇『猫と月』において、目の見えない男と足の悪い男 (Beggars) が肉体の治癒を求めて、お互いの不自由な部分を補填しつつ、聖コールマンの泉を目指し、泉で聖者と対面する。日本の古典芸能「狂言」を意識して作劇したイエイツは、二人に滑稽なやりとりをさせ、「笑い」が本作品の **keyword** となっている。定住せず、肉体に欠陥があるという二重の意味での社会の周縁者にとっての祈りの意味、そして、それを演劇で提示する時に「笑い」を用いる意義を、イエイツの他の作品に現れる周縁者や盲人も検討することで、読み解く。二人は **Hiberno-English** を話し、イエイツが住居としたゴールウェイ県バリリー塔近くの民話に基づき書かれた本作品は、イエイツが消失させてはいけなと心砕いたアイルランドの心と同時に、現代の我々が直面する問題も提示している。

民話における聖泉～現実と超自然の境界

Holy Wells in Folklore—Liminal Spaces between Reality and the Supernatural

梨本邦直 (法政大学)

NASHIMOTO, Kuninao (Hosei University)

聖泉 **holy wells** は、現在確認されているだけでもアイルランドに 3000 カ所以上ある。その信仰は古くから行われ、おそらくケルト時代の風習がキリスト教化されたと考えられている。本報告では、『猫と月』の舞台である聖泉について民話の観点から検討する。まず、聖泉を巡礼 **pattern** が行われる現実と超自然の境界域と捉え、その歴史・風習と聖泉の治癒効果を民話・民俗誌の描写に照らして概観する。次に、巡礼に伴う厳かな雰囲気とは真逆の縁日 **pattern day** の現実的側面についても考察を加える。最後に、聖コールマンの泉は、1937 年にフォークロア委員会がゴールウェイ南部のキルタータン小学校から収集した民話にも出現していることを確認する。

崇高・受苦・喜劇—アイルランドとヒロシマ、〈痛苦反転〉の祈りの場として

The Sublime, Passion, and Comedy:

Ireland and Hiroshima, or the Prayer's Sanctuaries for the "Suffering/Pain-Inversion"

桑島秀樹 (広島大学)

KUWAJIMA, Hideki (Hiroshima University)

18 世紀のアイルランド人 E・パークにより理論化された美的範疇たる「崇高」を、「痛苦反転」「表象不可能性」という観点から読み解く。そのうえで、キリスト教的な「受苦」を念頭において、「肉」を得てこの世に生きる人間の「生」の悲しみと喜びの問題と重ね合わせる。続いて、アイルランド芸術に特徴的なブラックユーモアとしての「死んだ鍋」「棘のある笑い」を踏まえながら、《想像を絶することが歴史的事実として起こってしまった》という事態をどう捉えどう対処するかを考察する。最後に、原爆のヒロシマ表象をめぐる問題を、カトリック精神に貫かれた作家・井上ひさしの恋愛喜劇『父と暮せば』を題材に、アイルランドとヒロシマをつなぐ「生」と「鎮魂」への祈りという視座から言及を試みる。

ボナー・フェラーズと戦後日本の平和—ラフカディオ・ハーンの日本理解から学ぶ—

Bonner Fellers and Postwar Peace in Japan:

Learning from Lafcadio Hearn's Understanding of Japan

小泉 凡（小泉八雲記念館館長、島根県立大学名誉教授）

KOIZUMI, Bon (Director, Lafcadio Hearn Memorial Museum

Professor Emeritus, The University of Shimane)

ダグラス・マッカーサーの側近でアメリカ陸軍准将ボナー・フェラーズ(Bonner Fellers/1896-1973)は、日本人留学生・渡辺ゆりの薦めで、ハーンの著作に親しみ、すべてを読破する。1930年にはじめて小泉家を訪問し、以後、小泉一雄（ハーンの長男）と親交を深める。対日戦では、心理戦のチーフとしてビラの投下を指揮し、日本兵の心理的武装を解き、和平を促す。戦後統治では、ハーンの「祖先信仰と天皇への敬愛は不可分」とする理解に基づき、象徴天皇制の扉を開くことに心血を注ぐ。帰国後は、ウォルト・ディズニーにハーンの映画化を依頼するなど、ハーンの顕彰を通して日米友好に力を尽くした。アイルランド人作家ハーンの日本理解が戦後日本にもたらした意味を考えてみたい。

12月1日（日）Sunday, 1 December

<研究発表 ① Paper 1>

「紛争」と「都市」の狭間で—ベルファスト丘陵における野外レクリエーションと環境保全—

In Between Conflict and City: Outdoor Recreation and Environmental Conservation in Belfast Hills

北島義和（釧路公立大学）

KITAJIMA, Yoshikazu (Kushiro Public University)

本報告では、北アイルランドの首都ベルファストに隣接する丘陵地帯（ベルファスト丘陵）における野外レクリエーションおよび環境保全活動の歴史を跡付けるとともに、特に西ベルファストのカトリック地区とその周辺を取り上げながら、そこで暮らす人々による丘陵をめぐる様々な実践について考察をおこなう。具体的には、これらの歴史や諸実践が「紛争問題」と「都市問題」という2つの問題およびフレームの絡まりあいの中にそれぞれ位置づけられること、そしてそれがベルファスト丘陵に関わる人々の間に様々な協働と軋轢を生みだしてきたことを明らかにする。

<研究発表 ② Paper 2>

エドモンド・バークと王国としてのアイルランド

Edmund Burke and Ireland as a Kingdom

貫 龍太（京都大学）

NUKI, Ryuta (Kyoto University)

「エドモンド・バークとアイルランド」というテーマが論じられる際、そのアイルランドとはブリテン帝国の植民地であることが暗黙の前提とされてきた。しかしながら、アイルランド史学において、近世アイルランドは植民地であったのか、それとも王国であったのかという問いが繰り返し提起されてきた。この問いから着想を得つつ本報告では、「王国としてのアイルランド」という認識とそこから派生する固有の問題意識がバークに見いだされるのかどうか、また、バークがアイルランドを王国とみなす言説にどのように応答したのかについて、バークの複数のテキストに散在する断片的な記述を手がかりに考察する。

<研究発表 ③ Paper 3>

アイルランド言語語文化の研究および復興運動は、ナチズムあるいはファシズムとどのように接触し、
いかなる関係を持ったのか？

How Did Irish Language Studies and Revival Movements Contact Nazism and Fascism?
What Was the Nature of Their Involvements?

廣野元昭（日本アイルランド協会会員）
HIRONO, Motoaki (Japan-Ireland Society)

アイルランド言語語文化の研究ならびに復興運動とナチズム、ファシズムとの接触については、この 40 年ほどで相当量の研究が蓄積しているが、実際のところかなり広範かつ多様な関係が判明しており、全体像の把握は容易ではなく、日本語での紹介もこれまでのところ断片的なものに留まっている。本報告では、古アイルランド法研究の第一人者であり、反ファシズム、反ナチズムの発言、著作でも知られる D.A. Binchy (1899-1989) を一つの対蹠点として、英語圏の先行研究でも十分に取り上げられていない事象も含めて彼をめぐる人々の動きを再考しながら、この重苦しくも決して目を背けることのできない歴史的現象について、一定の共通認識が形成できればと思う。

<研究発表④ Paper 4>

北アイルランドの現代女性小説家たち—変貌する社会の中で、新たな声—

Contemporary Female Novelists from Northern Ireland: New Voices in a Changing Society

八幡雅彦（別府大学短期大学部名誉教授）
YAHATA, Masahiko (Professor Emeritus, Beppu University Junior College)

2 月に北アイルランド自治政府が復活し、シン・フェインのミシェル・オニールが首相、DUP のエマ・リトル＝ペンゲリーが副首相（ともに女性）に就任するなど、北アイルランドの社会はダイナミックに変貌を遂げている。そのような社会の変貌に呼応して、新進気鋭の女性小説家たちの活躍が目立つようになってきた。彼女たちは過去の紛争を振り返りながら、現代の北アイルランドが抱える諸問題を小説の中で描き続けている。ジャン・カーソン、ルーシー・コールドウェル、ミシェル・ギャレン、ウエンディ・アースキン、レイチェル・コノリーらの作品がどのような今までにはない新たな声を上げているか、そしてどのような文学的価値を有しているかを論ずる。

※大会当日、各発表の詳しいレジュメ・資料を配布します。

ご案内

★大会参加費無料です。

★大会第二目の日曜日（12月1日）は、広島大キャンパス内の食堂・レストラン等は開いておりません。また、会場からキャンパス外の飲食店・コンビニへのアクセスは相当に時間を要します。ですので、**昼食**は各自ご用意ください（※飲み物の自動販売機はございます）。

★書籍展示・告知チラシ

大会二日目のみ会員の編著書を展示紹介できますので、ご希望の方は見本をご持参下さい。注文用紙等は各自でご用意下さい。なお、見本の管理は大会運営者側でできませんので、悪しからずご了解ください。また、参加者にお知らせしたいイベントのチラシなども受付付近に置くことができます。ご持参下さい。

★ 今大会（第1日・第2日）の運営責任者は、桑島秀樹先生（広島大学 大学院人間社会科学研究科／総合科学部・教授）です。 kuwajima@hiroshima-u.ac.jp

第1日会場案内

会場は、世界平和記念聖堂・カトリック幟町教会・（所在地：〒730-0016 広島県広島市中区幟町 4-42）です。世界平和記念聖堂・カトリック幟町教会は、JR 広島駅南口から徒歩 10 分、広電銀山町電停から徒歩 8 分。エリザベト音楽大学の隣にあります。『カトリック幟町教会 世界平和記念聖堂』ウェブサイト：<http://noboricho.catholic.hiroshima.jp/>



Google マップより

第2日会場案内

会場は、広島大学・東広島キャンパス（所在地：〒739-8521 東広島市鏡山一丁目7番1号）です。

※2024年3月31日をもって高速バス「グリーンフェニックス」（広島大学行）は廃止されました。



JR 東広島駅、西条駅、八本松駅から路線バス、もしくはタクシーをご利用ください。タクシーはどの駅からでも約15分、2000円ほどです。広島大学行バス（東広島キャンパス外周循環路線）で、バス停「広大西口」が最寄りです（※「広大中央口」「広島大学北口」下車は勧めません）。大会会場の総合科学部・管理棟（M棟）はキャンパス西側中ほど。3階第一会議室は、正面玄関から入ると2階部分です。

経路図・地図は広島大学ウェブサイトより

後援: 駐日アイルランド大使館



Ambasáid na hÉireann | An tSeapáin
Embassy of Ireland | Japan
アイルランド大使館 | 日本

共催: 広島大学・大学院人間社会科学研究科・

人間総合科学プログラム／総合科学部



広島大学